子ども俳句と震災 ―四季を発見する―

谷地快一

はじめに

俳句が〈たしなみの詩歌〉として、長く生き延びることを願い、考現学ともいうべき世界を模索している。本稿はそのために、「四季を発見する」ことの意義を主に指導者に向けて説くものである。

題目にいう「子ども俳句」の対象は中学生で、その教育の現場と現状を踏まえて、俳句の定義を五・七・五を基本とする十七拍の定型詩と規定する。

また、「震災」とは直接には東日本大震災（以下「大震災」と略す）を指す。すなわち、平成二十三年（二〇一一）三月十一日に発生した東北地方太平洋沖地震と津波による大災害である。広義にはこの地震と津波に伴う原子力発電所事故という悲劇を含むが、ここにその事故は取り上げない。理由は考察の対象とした地域を、原子力発電所被害をこうむった福島でなく、宮城県牡鹿郡女川町としたからである。

女川もまた原子力発電所をもつ町である。M（マグニチュード）9・0という大地震によって、この地域にも高さ十三メートルに及ぶ津波が押し寄せて、町は壊滅に等しい被害を受けた。だが、発電所は直後から翌日未明にかけて停止し、幸いにも甚大なる被害を免れている。

ところで、青森県八戸市から岩手県の太平洋岸を南下して宮城県の牡鹿半島まで、この海沿いはリアス式海岸や海岸段丘の景勝地で、三陸海岸と呼ばれる。だが、その美しさは地震と津波による悲劇と裏腹な関係にあった。

手もとに『田老物語―記憶編―』（平二七・一一、宮古市編）という冊子がある。これは岩手県宮古市の田老地区復興整備事業の業務記録として編まれた三冊のうちの一つだが、そこから三陸沖大震災の歴史を要約すれば、以下のようである。

一、**貞観地震**　平安時代の貞観十一年（八六九）五月二十六日発生。推定M8・3の、大津波を伴う巨大地震。藤原時平・菅原道真らが編んだ『日本三代実録』（巻十六）に克明な記録があり、「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ」（古今

集・東歌）や「ちぎりきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山波越さじとは」（清原元輔・後拾遺集・恋四）における歌枕「末の松山」の契機になった悲劇である。東日本大震災はこの地震の再来とされている。

二、慶長三陸地震　江戸時代の慶長十六年（一六一一）十月二十八日発生。推定M8・1の、大津波を伴う巨大地震。『駿府政事録』という徳川の記録に、伊達政宗（仙台藩）が「津波」の語を用いて、本件を家康に報告した旨が記される。

三、明治三陸地震　明治二十九年（一八九六）六月十五日発生。推定震度2程度ながら、当時、世界史上第二位、日本史上最大の津波が襲う。その回数は翌日の正午ころまでに大小数十回に及んだという。折しも端午の節句（旧暦五月五日）で、『大水海』という庶民の絵入り記録に「みなこのとうり。しんでながれるもあり。いキているもあり。きさあがるもあり。またカキニトリツキテタスカルモアリ。山ニアガルモアリ」とか「大ツ海　コノツ海ハ仙代（ママ）ヨリ八ノ戸マテ」「人ハナン千人ガしにたるか、かつしれづ」とあり。中に「水海にツキ御哥が御坐る」と前置きして「音に聞こゑしツ海のあとにきてみれバ泪ハながれてそてぞぬれける」などという和歌も記されている。

四、昭和三陸地震　昭和八年（一九三三）三月三日発生。推定M8・5の規模で、津波は第六波まで続き、町は翌朝には荒野と化していたという。明治三年の地震からわずか三十七年後のことであった。

五、東日本大震災　平成二十三年（二〇一一）三月十一日発生。三陸沖全体がM9・0の規模で、観測史上世界で四番目の巨大地震。東北地方太平洋沿岸部の地域が、地震と津波により多くの人命と町を失ったことは周知の通りである。

こうして、ざっくりと歴史を振り返るだけでも、震災は「末の松山」という歌枕や、「音に聞こゑし」と歌い出す和歌につながる事実に逢着する。大震災の経験をつづる中学生の俳句を教材に、詩歌の治癒力を模索したいと考える所以である。

一、教材の選定

考察の対象として取り上げる教材は、女川町立女川中学校（宮城県牡鹿郡女川町女川）で調査した全二六七句の俳句である（附録「女川中俳句」参照）。この学校は町内の高台に位置して、もと女川第一中学校と称したが、大震災により閉校となった離島の女川第二中学校（女川町出島合ノ浜）を併合し、大震災から約二年後の平成二十五年（二〇一三）四月、女川中学校として再出発している。

私は平成二十八年（二〇一六）七月二十八日（木）、宮城県石巻からJR石巻線を利用して女川町へ向かった。直接の目的は「女川いの

ちの石碑」を見ることであった（写真参照）。

女川町役場・教育委員会を経て、女川中学校へたどり着くと、その碑は正門前の草地に建っていた。次に碑文のすべてを示す。

碑面中央に名目として「女川いのちの石碑」と刻み、すぐ左に「千年後の命を守るために」と建碑の目的を添える。さらに、碑面の右には「二〇一一・三・一一　ここは、東日本大震災津波到達点より高い」と安全な高度に位置することを明言し、碑面の左には「夢だけは　壊せなかった　大震災」（附録「女川中俳句」262参照）という句が刻まれている。さらに、碑面下段に横書きで、後世の人々に向けた悲願のメッセージを刻む。それを縦書きに直す以外、極力原文に誠実に示す。

東日本大震災で、多くの人々の尊い命が失われました。地震後に起きた大津波によって、ふるさとは飲み込まれ、かけがえのないたくさんの宝物が奪われました。

「これから生まれてくる人たちに、あの悲しみ、あの苦しみを、再びあわせたくない!!」その願いで、「千年後の命を守る」ための対策案として、①非常時に助け合うため普段からの絆を強くする。②高台にまちを作り、避難路を整備する。③震災の記録を後世に残す。を合言葉に、私たちはこの石碑を建てました。

ここは、津波が到達した地点なので、絶対に移動させないでください。

もし、大きな地震が来たら、この石碑よりも上へ逃げてください。

逃げない人がいても、無理やりにでも連れ出してください。

家に戻ろうとしている人がいれば、絶対に引き止めてください。

今、女川町は、どうなっていますか？
悲しみで涙を流す人が少しでも減り、笑顔あふれる町になっていることを祈り、そして信じています。

２０１４年３月　女川中卒業生一同

この石碑に心を揺さぶられ、圧倒されつつカメラに収め、統合された女川中学校の受付を訪ねて訪問の目的を告げると、教頭の山内芳明先生（当時）が応接してくれ、いきさつを丁寧に説明してくれる。

すなわち、「女川いのちの石碑」という建碑事業は、震災当時に小学六年生であった子供たちを中心とする活動で、保護者有志が指導にあたり、中学校は直接関わっていないとのこと。石碑は今後も増え続けて、最終的には二十一基になる計画であるとのことであった。この悲劇を千年後の人々にも伝え、後世の人々の命を守る目的で建て始めたことは碑文に明らかだが、「夢だけは」の句に作者名がないことに関する質問は控えた。

教頭先生は、統合されて以後、震災俳句を作ることが毎年の行事になっているが、今年は震災そのものテーマとするものが全体の二割にすぎないといい、季語の強制もしていないという。それを聞きながら、わたしは詩歌の治癒力ということについて、その可能性をぼんやりと信じ始めていた。大震災の悲しみに寄り添いながら、その悲劇を少しずつ脱して生きる力を得ること。そこに詩歌教育の夢をみたいと思うのである。

正面玄関には、壁一面にＡ４判と思われる紙が貼ってあり、全体に保護のためのビニールシートがかけてある。照明のために読み取りにくい角度もあるが、右上冒頭に赤いフェルトペンで、廃校になった「女川二中」という見出しがあり、一枚にほぼ三句が記された全二六七句の俳句である。見出しから推測すれば、全句が女川第二中学校の生徒の作ということになるが、確証は得ていない。筆はほぼ黒いフェルトペンを用いて、いずれも作者名はないが、碑文にある「夢だけは　壊せなかった　大震災」（附録「女川中俳句」262参照）という句が含まれていることから、「女川いのちの石碑」のもとになる資料であることは確かである。快く撮影を許可していただき、本稿の教材にできたことは幸いであった。

ただし、本稿ではすべての句に言及する紙幅がない。よって、見出しの「女川二中」を「女川中俳句」と読み替えて、附録として末尾に一覧する。排列はほぼ五十音順とし、通し番号を付したので、適宜参照していただければ幸いである。

二、カタルシスとしての俳句

一般の芸術に異ならず、俳句に描かれる感慨とは物事にふれて起こる心の動き、つまり実感をもとにする。その心持ちは生きる力となって、人生を支えることが望ましい。しかし、日々の暮らしは〈あって

あたりまえ〉の連続だから、この時空を大切なものとして、常に自覚的に、意識的に暮らすのはむずかしい。

大切な日常を大切と思うのは、皮肉なことに、それを失ったときである。それは結果として、心の乱れや身体の不調となってあらわれたりする。その回避や安定のために日記が有効と聞いたことがある。恐怖や怒りを書き出すことで、カタルシス、つまり心の浄化が期待されるからだろう。

体験的に言って、初心のころの俳句は日々の出来事を、喜怒哀楽としてさらけだす点で日記に似ている。日記は日々の出来事を記録である。それは淡水の魚介類を料理する際の下ごしらえ、つまり泥抜き（泥吐き）に似ている。程度の差はあるだろうが、初心の俳句も、悲しみや怒りを客観視することで、一定の浄化は期待してよい。附録「女川中俳句」を参照すれば、「235ぼくたちはヘリコプターでひなんした」「16あの時に見たこうけいは忘れない」「203バス通学毎日見えるあの景色」「215ひさしぶり出合った友は泣いていた」などはそうした例で、俳句の定義を守りつつ、その記録性を装っている。

すなわち、自分の住んでいた土地、通っていた学校は離島だから、自力避難は不可能ゆえヘリコプターであったという。町や人々を呑み込んでゆく、津波の悲惨な光景は忘れられない、いや忘れてはいけないとつぶやく。震災後は仮設住宅暮らしで、高台にある新しい中学校へはスクールバスで通っているが、毎日車窓からガレキの景色は見るのは辛い。震災が一段落して友だちと再会したが、被災で目にしたもの、感じたことは、ただ泣くことでしか表現できなかった、というのである。

例示を続ける。「46失って初めて気づく大切さ」とは代償の大きすぎる教訓。「237毎日がケンカだったがでも今は」は兄弟喧嘩（げんか）であろうか。「でも今は」とは、その兄弟のいずれかが亡くなったことを暗示するのだろうか。とすれば、その喧嘩さえ懐かしく、死者を追慕する句でもある。「14あの壁は心の中に倒れこむ」の「壁」は津波という名の悲惨であろう、「心の中に倒れこむ」という見立ては知的であるし、「3逢いたくてでも会えなくて逢いたくて」には、もう逢えないという現実を承認できない、美しいリズムさえ流れている。

だが、こうした十七拍の記録を右のように解説できるのは、大震災という主題を前提にしているからで、その題目なしには鑑賞するのはむずかしい。これが「女川いのちの石碑」に刻まれた句「262夢だけは壊せなかった大震災」との相違である。この句は前提となる「大震災」を十七拍のなかに取り込んでいる。それで表現として自立を果たしている。取り込まない場合は「大震災」を前書に据えることで、不足を補うことができる。そうしなければ、十七拍の表現は散文の一部を切り出す範囲にとどまってしまう。

和歌に詞書が許されたように、俳句にも前書は許されている。前書は作品の一部である。子ども俳句に限ることではないが、詩歌の掲出

にあたっては、その題目や前書を共に示すという心掛けを忘れてはなるまい。

三、失われたもの

「女川中俳句」は大震災で何を失ったと詠んでいるのか。

子どもたちが失ったものは、たとえば「家」であり「家族」「友だち」であった。「53大津波全てを飲み込み家壊れ」であり、「8あたたかい家族の笑顔そこにある」という「そこ」とは壊れる前の家という時空であろう。「41今はなきおばと歩いた浜の道」は伯母（叔母）も浜沿いの道もすでにないことを告げている。「54おじいちゃん海が恋人デートしに」という句の「おじいちゃん」と「海」は赤いフェルトペンで強調してある。ただ書き下すのでは受け入れがたい思いが赤ペンを手にとらせたのだ。その気持ちを汲むと、海すなわち漁場を仕事場に生きた祖父は津波にのまれ、行方不明のままである。その死を承認することを拒み、今も生き続ける存在として描こうとする痛々しいふるまいが「恋人」ということばを紡ぎ出したにちがいない。

「213ぴーちゃんの笑った顔にまた会いたい」と願う「ぴーちゃん」とは誰か。実はこの句には、弟とも、妹ともみえる似顔絵を添えている。嘆きは「3逢いたくてでも会えなくて逢いたくて」と同じである。どうあがいても、「161ただいまと聞きたい声がきこえない」のである。それは「230会いたいな君を思って泣いた夜」でもあろう。

失ったものは、たとえば「景色・風景」であった。めずらしく「悪者」という前書を付して「106黒つなみ女川町の景色を消しさった」という句がある。前書を踏まえれば「悪者」は「黒つなみ」である。震災後の報道によれば、この黒い津波は三陸に多い入り海の、流れの少ない海底に堆積したヘドロ（粘性の強い沈殿物）で、油や重金属などの有害物質を含んで重たく、その押し流す力が被害を大きくしたという。「悪者」という前書はまことに率直な叫びなのだ。

同じ視点は「色泥棒」という前書で「105黒い波のまれて消える町の色」と描かせ、「104黒い海心も町も持ってった」と嘆かせた。そして、この「悪者」が残したものは「211春なのに明るい色がない景色」であり、「243窓の外いつもと違うあの景色」「247見る景色いつもと違うふるさとが」という悲しみで、「71女川の昔の景色思い出す」「48海の町どこへ行ったのあの風景」という回想であった。幸いにして被害を免れたアルバムを見て「196なつかしや写真で見ているあの景色」とつぶやく気持ちには複雑なものであったろう。

失ったものは、たとえば「町」であった。女川湾は北上山地と太平洋が織りなすリアス式海岸で、金華山沖の漁場から豊富な種類の水揚げがある有数の漁港。その繁栄ぶりは「251みなと祭りこんな状況でもやりたいな」とか「256もう一度みたいけしきは夏祭り」という願望につながっている。これは七月の女川港一円に繰り広げられる「女川みなと祭り」で、海上に獅子舞が舞い、花火があがる、発展の象徴のよ

うなものであったと聞く。だが、悲しみにくれる子どもたちは「145好きだった女川町が流れてく」「264夜寝ると前の女川思い出す」「82思い出す津波がのみこむ女川町」と嘆くしかなかった。

失ったものは、たとえば「思い出」であった。それは一般には「255目をとじれば思い出されるあの日々を」や「158大好きな思い出、時間宝物」のように、心に深く刻まれているものを意味する。しかし、「83思い出が宝物なのに全部ない」「85思い出はガレキの山になっちゃった」「163楽しかったあの日の思い出流された」などを見ると、「194流されたアルバムの中の思い出が」という句と同様に、それは昔を思い浮かべる手掛かりとなるもの、つまり写真集などを指すようだ。「アルバム」とは津波に流された写真帳と、思い出の日々とが一つのものなのだ。それは眠ると夢に出てくる「264前の女川」であり、「158大好きな、時間」でもあるのだろう。

以上、便宜的に失われたものを「家」「家族」「友だち」「景色（風景）」「町」「思い出」に分けて子ども俳句を紹介してみたが、これらを一括すれば〈幸せを実感する心〉とも言える。「122幸せと感じなかったあの頃は」「136震災にいつもの幸せ教えられ」などは、震災前のありふれた毎日こそ、かけがえのない幸福の日々であったことを伝えている。子どもらしく疑問符をつけて「199ねえ神様ホントの幸せどこですか?」と問い掛けるたびに起きるフラッシュバック。〈心の浄化〉の道があることを願うばかりである。

だが、これらも「大震災」という主題を前提にしなければ、散文の断片に終わってしまうことは前章の句と同じである。彼らに将来にわたって俳句という文化を担ってもらうために、この散文の断片を抜け出すために先を急ぎたい。

四、四季を発見する

見出しの「四季を発見する」とは、春夏秋冬の移ろいを五感でとらえ、ことばに移すことをいう。「二、カタルシスとしての俳句」や「三、失われたもの」の章で例示した句の散文性は「大震災」と前書するか、それを十七拍の中に取り込むことで、一応技術的には解決する。そうではなくて、もう少し意識的に、とらわれている日常を離れる意思（気持ち）と、意志（心の働き）を確かなものにして、悲しみの堪えがたい重さから解放される道を探りたい。

人間の暮らしが〈あってあたりまえ〉の時間であることは「カタルシスとしての俳句」の章で述べた。実は「四季を発見する」行為は、そのすぐ傍らにある〈もう一つのあたりまえ〉を発見する行為である。「大震災」という現実を前にして、忘れていたかもしれないが、宙を舞う蝶や、地を這う蟻も、私たちと同じく生きていることに気づくこと。これが「四季を発見する」ことである。木も生きているし、夢もあるはずだという目の涵養（かんよう）である。先に、「失われたもの」を一括して〈幸せを実感する心〉と述べたが、その「心」を和らげ、復元

へと導く学習である。

私が「女川中俳句」の調査にあたったのは、平成二十八年（二〇一六）の夏である。それは「大震災」から六年後、「女川いのちの石碑」建碑から二年後にあたる。よって、「女川中俳句」には喪失の悲鳴ばかりでなく、四季の移ろいに癒やされている句も含まれる。そこで、作者名も詠まれた時期も未確認ながら、春の句が多いことに注目して、以下に「四季を発見する」子ども俳句をあげて、痛みを和らげてゆく様子を確認したい。なお、季題（季語）、および季題になる可能性のある言葉に傍線をつけたが、一句に二つの季題を含む場合の二つ目以降には二重傍線を用いた。それは便宜的なものであり、季重なりについては言及しない。

まず冬の句ながら、春を意識した句から始める。

「210春近し恋の香りがしてきたよ」とは〈春がそこまで来ている〉という晩冬の句。そこに「恋の香り」を嗅ぎとるのは「春」に新生や再生の意味を与えているからだろう。「43うぐいすよ早く泣け泣け春よこい」の「うぐいす」は春季のことばだが、「春よこい」は「春近し」に同じで、待春つまり「春を待ちわびる思い」ゆえ、晩冬の句とする。「泣け泣け」は「鳴け鳴け」のつもりで他意はないだろう。

次は春の句である。

前段に「43うぐいす」が登場したので、続けて二例をあげる。「62女川に新たな春を告げる鳥」と「231ホーケキョ春を知らせに訪れた」である。本人の意図は確かめようがないが、前者の「鳥」は「新しい春を告げる」という句意から「うぐいす」になる。句意は〈うぐいすが鳴いた〉とだけ言っているが、春告げ鳥とよばれて、初春の梅の開花に合わせるように、山から人里に姿を現す生態に合致。「新たな春」に震災後の町という意をこめて明るい世界に転じている。後者は「ホーホケキョ」が鶯の聞きなしである。

春は二十四節気の立春（二月四日ころ）を初めとする。「春が来た」といえば立春のことだが、子ども俳句の場合はもう少しゆるやかで、広い時空であろう。「207春がきたあたらしいコト始めようかな」には句末に吹きだしを作り、その中に弦楽器（ギターか）の絵が描かれている。俳句は古来、和歌の上の句（五・七・五）と下の句（七・七）を掛け合う文芸だったことを思えば、十七拍に不足なものを、絵で補う行為は理に叶ったもので、受け入れるべき様式である。「208春が来た見えるけしきはもうちがう」という句は「大震災」を引きずっているが、「見えるけしきはもうちがう」には新しい日常へ自分を開放しようとする前向きな心持ちが見えよう。

同じ気持ちは春風の句にもある。「18あのときをしばし忘れる春一番」「206春風は感じることができるのに」という二句があって、両句とも言外に「大震災」を匂わせるが、「205春風が背中を押してふいていく」と同じく、心の回復を感じさせるものである。特に「205春風が」の句は「春風」と「押」を色塗りして強調し、十七拍では言い足

りない思いが見えて微笑ましい。なお、「春風」があるので、「ふいてゆく」は一見して無駄だが、「あのとき」を忘れさせようとする風、過ぎ去る風の動きを伝えたいと理解すれば有効な表現といってよい。

「残雪」「雪解け」を題とする句が二つある。「260雪残る春の大地に芽吹く花」「261雪どけは新しい季節の香りかな」である。前者は残雪の他に「春」「芽吹く花」と三つの季題があって、今後指導すべき課題が多いが、まずは〈残雪にめげることのない生命力をとらえている〉点を評価してやるべきだろう。後者には雪国の人ならではの〈雪解の匂い〉という観察があって新鮮。

「芽吹き」は「芽立ち」のことだから、木の芽がそれらしい形になってくることである。だから「260雪残る」の下五「芽吹く花」の「花」は無駄である。同じことは「31一度きり別れも出会いも芽ぶく春」にも言えて、次の段階では「芽ぶく」があれば「花」はいらない、「花」があれば「芽ぶく」ではないという知識を学びたい。だが、〈別れにおいても、出会いにおいても春は特別な季節〉という認識は育むべき感性である。もう一句「223蕗のとう強く芽を出し告げる春」は木の芽ではないし、「蕗のとう強く芽を出し」も詩歌に親しんでくれば「蕗の芽」で済むことを学ぶことになるが、子ども俳句においては〈蕗の薹で春が始まる〉という発見を新鮮と見ておきたい。

「蒲公英」の句が三句ある。一句目は「35いつだって道のタンポポ負けてない」というもので、句末に蒲公英の絵を描き添える。ここには「207春がきたあたらしいコト始めようかな」に添えられた弦楽器（ギターか）の絵の場合と似ていながら、少し異なる課題がみえる。それは弦楽器の絵は「207春がきた」という句に描かれていなかったから、絵を添えることで俳句の世界をひろげたが、「35いつだって」の句末に描かれた蒲公英は十七拍の句中に「タンポポ」として存在するから、屋上屋を架す結果に終わっている点である。これを子どもがすぐにマスターするのはむずかしいかもしれないが、〈描き添えたい願望があるときは、十七拍の言葉の外にあるものがおもしろい〉という程度のことは伝えたい。残る二句は「167たんぽぽのわたげがとんでる春風と」と「168たんぽぽや風に吹かれて舞う綿毛」である。共に蒲公英の花でなく「綿毛」を詠んで、心地よい景色になっている。なお、メルヘンのように風に飛ぶ「綿毛」は、実は〈綿毛に包まれた種〉というのが正確で、「蒲公英の絮（わた）」と書くのが通例だが、漢字制限のある教育現場で「絮」の字を求める必要はないであろう。

複数の例句がある季題に、もう一つ「しゃぼんだま（石鹸玉）」がある。これには一年の始まりに明るさを添える子どもの遊びとして、春の季節が与えられているが、例句は「大震災」で亡くなった人々を供養する行事を背景にするのかもしれない。「4青い空見上げてみればしゃぼん玉」「52大空へわれずにとんでけしゃぼん玉」「128しゃぼんだま大空とんだあの人たちと」「129しゃぼん玉空を突き抜け宇宙まで」という四句に、等しく鎮魂の「空」が見える。

その他、例句が一句ずつある季題をまとめると、「土筆」で「250道ばたに立てるつくしも夢抱く」、「風光る」で「89風光り女川町に希望あり」、「春の海」で「224複雑な思いで見つめる春の海」、「温かし（ぬくし）」で「217一人じゃないみんなでつなげばほら温かい手」などがある。すべて「大震災」の事実を踏まえながらも表現として自立し、まばゆい風景に、やわらかい風を吹かせて、希望のきざしを感じさせる。

最後にとりわけ例句の多い「花」と「桜」について、解釈と鑑賞のヒントに古典文学の約束事に触れておきたい。花という言葉の源はハナ（端）で、意味は物事の初め。よって百花に先がけて咲くことを愛して、梅の花をいう時代があり、愛でる対象を桜の花に代表させた平安時代後期につながる。以後は「花」すなわち「桜」の例が主流。愛でる理由は〈美しいものとして心に映る〉からだが、その感動を支えてきたものは「121桜花咲くも散るのも早きかな」という句が示すように、〈咲いて、散る〉という〈変わりやすさ〉である。よって、「63女川に桜の花びらひらひらと」「119桜散るまた咲きほこれ満開に」「177津波にね負けない大きな桜の木」などには、「209春がきて心の中にも花が咲く」という句が教えるように、植物としての「桜」に重ねるように、「心の花」とでもいうべき生きる力が詠みこまれている。「79女川は町じゅう全体花が咲く」「169散った花ふたたびいつか花開く」「92枯れちゃっただから再び花咲かす」などの「花」にも、前向きに生きてゆこうとする意思が見えて美しい。例外は「249道ばたに希望が咲いた青い花」で、これを桜とみる人はいないが、「四季を発見する」ゆとりが感じられる点は評価すべきであろう。

むすびに

本稿を書いている令和二年（二〇二〇）は東日本大震災から九年目のことで、あたりまえながら、やがて来る三月十一日は満十年の節目である。「女川いのちの石碑」は当時小学六年生の児童が中学生になってからの活動が実を結んだものというから、今は二十歳を過ぎた大人になっている。大人になって、今も俳句を続けていてくれるだろうかと思う。彼らが続けていなければ、他にどんな若者がこの文化を受け継ぐであろうかとも思う。

小賢しいと非難されるかもしれないが、俳句という文化はひたすら衰退の道をすすんでいる。これは疑いようがない。松尾芭蕉が達成した「軽み」や、正岡子規が説き始めた「写生」という指標は大衆化をめざす擬死再生の試みだったが、今日そうしたエネルギーを感じさせる動きはない。それが俳人の高齢化と若手育成の困難に拍車をかけている。古典俳諧を仕事にして来た者としては、それが悲しい。こうした「たしなみの文化」を人生の杖として、多くの人々を支えてきた歴史を見続けてきたからである。

すでに俳人と呼ばれる人々は、身につけた美学を全うすればよいの

であるが、これからの世代に継承してもらうためには、学校教育の場を借りるより道はない。本稿はそんなことを願いながら模索する考現学の試みの一つである。

〔附録〕女川中俳句（全）

1 愛してたきれいな町並みまた見たい
2 愛すべき未来のために我が道を
　注・「愛」「未来」「道」を朱文字にする。
3 逢いたくてでも会えなくて逢いたくて
4 青い空見上げてみればしゃぼん玉
5 青い空見てるとなんだか頑張れる
6 青い空みまもっててねいつまでも
7 あきらめず立ち向かおうよ高い壁
8 あたたかい家族の笑顔そこにある
9 あたたかさその日が最後思い出す
10 あたらしい町をおれらがつくってみせる
11 新しい明日目指して一歩ずつ
12 新しく女川は今生まれ変わる
13 新しくきざんでゆくよ思い出を
14 壱あの壁は心の中に倒れこむ
15 あの景色また女川で見るために
16 あの時に見たこうけいは忘れない
17 あのときのたくさんの星きれいだな
18 あのときをしばし忘れる春一番
19 あの波をこえて見るのはあの花火
20 あの日まで幸せなのはあたりまえ
21 あの街にまたもどりたいなあの場所に
22 あの町をまた歩きたいゆっくりと
23 天の川流れ星降れば願い事
24 あめっこは震災時の非常食
25 ありがとうきっと伝わる希望だよ
26 ありがとう感謝の気持ち大切に
27 ありがとう今なら恥じず心から
28 ありがとう今度は私が頑張るね
　注・感謝の相手は震災による死者か。
29 ありがとう自衛隊に伝えたい
30 一週間遅れてやった卒業式
31 一度きり別れも出会いも芽ぶく春
32 いつかまたみんなでにぎわうあの町へ
33 いつだってキラキラ輝く女川町
　注・星（☆）の絵八個をちりばめる。
34 いつだって消えることない青い空
35 いつだって道のタンポポ負けてない
　注・句末に蒲公英のの絵。
36 いつの日か再び会えるあの町に
37 今こそだ日本みんなでがんばろう
38 今だから笑顔が大事女川町
39 今だってきれいな海だ女川湾
　注・「海」と「女川湾」を青色でなぞり、句末に鳥の飛ぶ女川湾を防潮堤とともに描く。
40 今放つ希望のシュートに思いのせ
41 今はなきおばと歩いた浜の道
42 忌まわしいあの日は未だ君の中
43 うぐいすよ早く泣け泣け春よこい
44 失った町の風景取りもどす
45 失った町はきっと取り戻す
46 失って初めて気づく大切さ
47 海の上船の上ではししが舞う

48海の町どこへ行ったのあの風景
49海を見て思う心は月にいく
50うらんでもうらみきれない青い海
51絵をかいて梅干し食べて本を読む
52大空へわれずにとんでけしゃぼん玉
　注・「大空」を赤く塗り、「しゃぼん玉」を青字にする。
53大津波全てを飲み込み家壊れ
54おじいちゃん海が恋人デートしに
　注・「おじいちゃん」「海」を赤く強調。
55おだづなよ、地震のせいで、津波きた
　注・「おだづなよ」未詳。
56おとうとと一緒に歩く通学路
57女川町いつかあの頃取り戻す
58女川町元気と笑顔で復興へ
59女川町復興にむけてがんばろう
60女川町未来のためにがんばろう
61女川が光輝く復興後
62女川に新たな春を告げる鳥
63女川に桜の花びらひらひらと
　注・「桜」「花びら」を赤く強調。
64女川に笑いがもどる子どもたち
65女川にやさしい人がほほえんだ
　注・64・65の二句は筆蹟が酷似。同一作者の可能性あり。
66女川に笑いがもどるまでがんばるぞ
67女川の希望の星はぼくたちだ
68女川のきれいな景色もう一度
69女川のために俺は何できる
70女川の人々絶対くじけない
71女川の昔の景色思い出す
72女川にきれいなけしきをとりもどせ
73女川は明日への道を切り開く
74女川は新たなスタート切っている
75女川は今、何色に見えますか？
76女川は美しい町負けないぞ
　注・「美しい」を赤い文字で強調。
77女川は絶対元に戻るはず
78女川は流されたんじゃねえんだよ
79女川は町じゅう全体花が咲く
80女川をきれいな町にもどしたい
81女川を造っていこういい町に
82思い出す津波がのみこむ女川町
83思い出が宝物なのに全部ない
84思い出とあとに残るは海の跡
85思い出はガレキの山になっちゃった
86音楽でみんなの心が一つになれる
　注・句末に八分音符の絵。
87□□□□□笑顔になった畳ふみ
　注・上五文字難読。「畳ふみ」未詳。

■か

88海水についたすずらん咲いていた
　注・鈴蘭一輪の絵を添える。
89風光り女川町に希望あり
90がれき見て空に誓った涙こらえて
91神様が与えた試練乗り越えて
92枯れちゃっただから再び花咲かす
　注・句末に花びらの絵。この「花」は桜とも桜でないともとれる。
93かんどうだあの日のがれきもう消えた
94がんばるぞこんなのにまけてたまるかよ

95ガンバレとささやく町の風の声
96がんばろう女川町復興のために
97消えてった大切なものまた造る
98きっといるペットのカメは海の中
99キラキラと輝く海が好きなんです
100きれいな町みんなの笑顔で取りもどそう
101くやしいなどうして皆がこんなめに
102暗い夜たくさんあるさ希望の星
103グランドに光り輝く笑顔と絆
104黒い海心も町も持ってった
105黒い波のまれて消える町の色
　注・「色泥棒」という前書あり。
106黒つなみ女川町の景色を消しさった
　注・「悪者」という前書あり。
107工事中沈む私の応援歌
108子供達笑う事を忘れない
109この風があの真実をかたってる
110この星にいろんな願いこめられる
111この町を黒いカーテン包みゆく
112これからの未来をつくるその一歩
113これを機に和を広げようこの世界
114こんなときだから深まる友情が
　注・一句全体に花びらをちりばめる。

■さ

115さあ行こう明るい未来へ一歩前進
116さえずりが平和に響くこの世界
117坂のぼり上から見えるスタート地点
118サッカーはいつでも人つなぐゴールへ向かって
119桜散るまた咲きほこれ満開に
120桜の木毎年撮ってたあの木はどこへ
121桜花咲くも散るのも早きかな
122幸せと感じなかったあの頃は
123支援をね、いっぱいもらい大切に
　注・「ね」は語調を整える口語調の特色のひとつ。
124地震雲みかん見たいにオレンジだ
　注・「地震雲」は俗伝。大地震の前後にあらわれるという形状特殊な雲。
125しずけさや日暮と共に訪ずれる
126知ったことそれは家族の大切さ
127死ぬ前に一度食べたい焼肉飯
128しゃぼんだま大空とんだあの人たちと
129しゃぼん玉空を突き抜け宇宙まで
130将来は小さな子供に今を伝える
131新学期新たな決意胸に秘め
132震災後女川見た時おどろいた
133震災で心が一つになった復興!!
134震災でみんなが一つに希望の輪
135震災でふとった体をしぼらなきゃ
136震災にいつもの幸せ教えられ
137震災に負けじとがんばる子供たち
138震災に負けずに夢を追いかける
139震災に負けたらだめだ自分たち
140震災に負けてたまるか女川町
　注・「負けてたまるか」を赤い波線で囲む。
141震災は心をつなぐ第一歩
142震災は新女川の第一歩
143震災をうけてもふるさと離れない
144震災を忘れられないいつまでも

145 好きだった女川町が流れてく
146 少しずつ笑顔が戻るぼくたちに
147 雀の子とべよとべよとせかす母
148 全国の希望をのせて復興だ
149 全国の決勝戦で大歓声
150 そばにいる仲間がずっとそばにいる
151 ソフト部の先輩かっこいいあこがれる
　注・「部活」という前書あり。
152 そよそよと風に吹かれてなびく海
153 空いっぱい皮肉だけれど星光る
　注・「停電」という前書あり。
154 そらの上見守られてる私達

■た

155 大事だと思っていることきっとある
156 だいじょうぶそれは希望の合い言葉
157 大震災今だからこそやってやる
　注・「大震災」で切れている。
158 大好きな思い出、時間宝物
159 太平洋、女川の町に牙をむく
160 女川に豊（か）な海が牙をむく
　注・原文「豊な」に「か」を補った。159・160は筆蹟から同一生徒の作か。
161 ただいまと聞きたい声がきこえない
162 達成は一歩いっぽのつみかさね
163 楽しかったあの日の思い出流された
164 旅に出たやさしいあかり帰ってこい
165 食べたいな毎年楽しみかき氷
166 単調なただ濃淡のこの日々よ
167 たんぽぽのわたげがとんでる春風と
168 たんぽぽや風に吹かれて舞う綿毛
169 散った花ふたたびいつか花開く
170 中学校制服なしでの初登校
171 町民を元気にするぞ中学生
　注・「元気にするぞ」を波線で包む。
172 月を見て世界の思い空にいく
173 伝えたいみんなの気持ち音楽で
　注・句末に八分音符の絵。
174 包み込め希望の光でこの女川（まち）を
175 つなげようみんなの心みんなの笑顔
176 津波から復興に向かってかけ上がる
177 津波にね負けない大きな桜の木
　注・「ね」は123「支援をね」同様、語調を整える口語調の特色。
178 つらかった水、電気がない震災後
179 辛くてもあの人のために一歩ずつ
180 つらくても笑顔に変わるときがくる
181 つれてこう痛みもつらさも何もかも
182 手をつなぎ明るい未来へさあ行くぞ
183 天国と地獄の境はどこですか？
　注・「天国」を黄色で、「地獄」を赤で強調する。疑問符も子ども俳句らしい試み。
184 天国の人たちきっと笑ってる
185 東北は地震なんかに負けないぞ
186 時もまた雲と一緒に進んでる
187 友達と今も変わらぬカタリ合い
188 トランプをみんなでやって楽しいな
189 取り戻す空（に）誓うこの思い
　注・仮に「に」を補った。
190 取り戻すどんなに時間かかっても
191 取り戻せ自然豊かな女川を

192 取りもどせ自分のふるさと女川町
193 とりもどそう笑顔があふれる女川町

■な

194 流されたアルバムの中の思い出が
195 なくなったまた一からのスタートだ
196 なつかしや写真で見ているあの景色
197 乗り超えるそれが俺たち女川っ子
198 西側と東で変わる観る世界
199 ねえ神様ホントの幸せどこですか？
注・183同様疑問符は子ども俳句らしい試み。

■は

200 配食の少なさで思うありがたさ
201 バドミントン大会でたくて素ぶりする
202 はしゃいでたあの頃にまたもどりたい
203 バス通学毎日見えるあの景色
204 花びらのピンクに染まる椿かな
注・「ピンク」に色づけする。
205 春風が背中を押してふいていく
注・「春風」と「押」を色塗りする。
206 春風は感じることができるのに
207 春がきたあたらしいコト始めようかな
注・句末に吹きだしを作り、その中に弦楽器（ギターか）の絵。
208 春が来た見えるけしきはもうちがう
209 春がきて心の中にも花が咲く
210 春近し恋の香りがしてきたよ
211 春なのに明るい色がない景色
212 晴れの日は海がキラキラ宝石箱
注・句頭に太陽、句末に海の絵。
213 ぴーちゃんの笑った顔にまた会いたい
注・弟とも妹ともみえる似顔絵を添える。
214 被災地（の）皆と協力復興へ
注・「Happy」と、もう一文字（難読）を添える。
215 ひさしぶり出合った友は泣いていた
216 一人じゃない仲間がいるよいつまでも
217 一人じゃないみんなでつなげばほら温かい手
218 昼飯を楽しみにしても同じだよ
219 ひろげよう世界中の希望の輪
220 貧血で食べ物逃がし腹が減る
221 部活中ボールをすかしてすっこけた
222 部活動一生懸命がんばるぞ
223 蕗のとう強く芽を出し告げる春
224 複雑な思いで見つめる春の海
225 復興に向けて広がる青い空
226 復興をいのり続ける子供達
227 故郷を奪わないでと手を伸ばす
228 プロ野球ファインプレーに胸おどる
229 勉強中君と笑ったあの時間
230 会いたいな君を思って泣いた夜
注・229・230は筆蹟から同一生徒の作か。
231 ホーケキョ春を知らせに訪れた
232 ぼく達が女川町をとりもどす
233 僕達が元気にさせる女川を
234 ぼくたちの心は一つ復興だ
235 ぼくたちはヘリコプターでひなんした
236 滅び切り再び築けもう一度
注・「一度」を白抜きのイラスト文字にする。

■ま

237 毎日がケンカだったがでも今は
238 前向いて歩き続けてこの時を
239 負けないでみんなの希望かなうはず
240 真っ暗闇どれだけ明りを灯せるか
241 まっててね今、届けるよおばあちゃん
　注・郵便ポストの絵を添えている。
242 窓ぎわで見えてくるのは未来の町
243 窓の外いつもと違うあの景色
244 みあげればがれきの上にこいのぼり
245 見えて来たあの日に消えた笑い顔
246 見たことない女川町を受けとめる
247 見る景色いつもと違うふるさとが
248 見渡すとあたり一面ガレキだけ
249 道ばたに希望が咲いた青い花
　注・「泥の道」という前書あり。
250 道ばたに立てるつくしも夢抱く
251 みなと祭りこんな状況でもやりたいな
252 未来ではどうなっている女川は
253 未来をね『力』を合わせてつくっていこう
254 みんなの前笑えてるかな自分の顔
255 目をとじれば思い出されるあの日々を
256 もう一度みたいけしきは夏祭り
257 戻したい笑顔集まる女川町
　注・黄色で星二つをあしらう。
258 戻したい笑顔あふれる女川町
　注・覗く太陽の絵を赤く描き、「笑顔」も赤く塗る。
259 戻りたい笑顔あふれたあの時に

■や

260 雪残る春の大地に芽吹く花
261 雪どけは新しい季節の香りかな
262 夢だけは壊せなかった大震災
　注・記念碑に刻まれた句。
263 夢をより固く決意し明日へ行く
　注》「明日」に「あす」とルビ。
264 夜寝ると前の女川思い出す

■わ

265 忘れないこの悲しみを苦しみを
266 私らのキーワードは「がんばっぺ」
267 笑う事忘れていけない子供たち

〔付記〕本稿は山崎甲一氏を代表とする研究プロジェクト「日本、モンゴル、インド、中国における共生的精神文化の諸相」（東洋大学東洋学研究所、平成26～28）の成果の一部をまとめたものである。

キーワード
東日本大震災・カタルシス・日常・詩歌の治癒力・四季の発見